
空をもう一度

たろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空をもう一度

【Nコード】

N1417A

【作者名】

たろう

【あらすじ】

201X年、南関東を地震が襲った。被害は過去最悪を記録し、日本にとてつもない打撃を与えた。地震が起こったとき、清水亮輔は病院に行くため、その地下鉄に乗っていた。小林聡士は学校に通うため、その地下鉄に乗っていた。大村空は映画館に行くため、その地下鉄に乗っていた。

序章 事実

【南関東大震災】

201X年、南関東一帯をマグニチュード7.5の直下型地震が襲った。

その被害は史上最大であり、死者・行方不明者は過去の自然災害の記録を大幅に更新し、また、政治・経済面にも大きなダメージを与えた。

日本政府は名古屋に災害対策本部を設置し、首都機能回復に全力を注いだ。未だに被災以前の3割ほどしか機能しておらず、政府は202X年に首都を現在の大阪に移した。

抜粋

ヒカリ文庫『最新版・中学で学ぶ日本の現代社会』より

序章 事実（後書き）

まだまだ半人前、いや、4分の1人前の未熟者ですが、どうぞあたたく見守ってくださいm（――）m

1章 それぞれの日常

1・清水亮輔

車内には人の姿はほとんどなかった。

午前11時。

亮輔はこの時間に電車に乗るのは初めてだった。

いつもは朝の通勤ラッシュの時間帯に乗り、満員電車の悪い空気を吸いながら学校に通うのだ。

今日に限ってこの時間に乗っているにはわけがある。病院に行くためだ。

サッカー部でレギュラーの亮輔は、昨日の試合で倒れた時に手首をひねってしまった。

試合中は気にならなかったが、試合が終わると激しい痛みに襲われ、今日学校を休んで病院に行くことにしたのである。

亮輔はふと鞆から保険証を取り出して眺めた。

家族構成

清水 良子（母）

亮輔（兄）

真由（妹）

……あのクソ親父……。記憶が断片的に蘇る。

一週間に一度しか帰ってこないくせに、帰ってきては酒をあびるよ
うに飲み、母さんに暴力をふるう父。

稼いだ金は競馬につき込むため、母さんがパートで得た金だけで質
素に暮らしていた日々。

亮輔はそれ以上思い出すのが嫌になり、目を窓の外に移した。

無機質な地下鉄の壁がただ右から左に流れるのを見てみると、少しずつ心が落ち着いてゆくのが分かった。

2・小林聡士

「やべーな、早くしないと皆勤賞が……」
聡士はつぶやいた。

中高一貫校に通う聡士は中学1年から高校2年になる今まで一度たりとも休んだことはなかった。

当然ながらこの記録に誇りを持っていた。

しかし、今、その記録に最大の危機が訪れている。
寝坊である。

昨夜、テスト勉強を遅くまでしていたせいか、今朝聡士が起きたのは10時半であった。

この時点で無遅刻無欠席の記録は断られたのだが、諦めの悪い聡士は無欠席記録だけは譲れない！とばかりに家を飛び出たのだった。

しかし、悪いことは重なるもので、今日は中間試験で、学校は11時半に終わってしまう。

すなわち、11時半のチャイムまでに校門をくぐれるかが勝負の分かれ目である。

聡士は携帯電話を見た。液晶画面は11時を表示していた。

3・大村空

『もうすぐ着くよ。今から楽しみ（＾o＾）』
「送信！っ」と

空は送信ボタンを押した。しかし、

『エラー：電波状況がよくありません。電波状況のよい所でもう一度送り直してください』

「そっか、地下鉄乗ってるんだった」

空はそう言っていると携帯電話をしまった。

今日は空の通う高校の創立記念日。

そこで、友達の佳奈と映画を見に行くことにしたのだ。

佳奈とは中学で出会い、今では親友と呼べるくらい仲がいい。

積極的な性格で、しょっちゅう合コンを計画している。

空もいつも誘われるのだが、空は自他共に認める照れ屋で、毎回断っている。

「空かわいいから絶対すぐに彼氏できるのにな」

空が断るたびに佳奈はそう言う。

当然空にはいままで彼氏ができたことがなかった。

「まあ、いたところでどうってことないし」

なんて言ってみても、半分は強がりだっことは自分が一番分かっていた。

2章 突然の襲来

窓の外を眺めていた亮輔は、景色が不自然に上下するのを見た。直後、

キイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！！

というすさまじい音とともに、電車が急にブレーキをかけたのが分かった。

亮輔は思った。何かヤバいことが起こったんだ。

—————

電車が止まってからも上下の揺れは収まらなかった。

地震だ！しかもいままでにないくらいの。もしかしたら死ぬかも……。

……

……助かったのか？心臓がバクバクいつている。

汗もすごいかいている。なにより生きてる。よかった……。

『え、ただいま地震が発生した模様です。しばらくこのままでお待ちください』

車内アナウンスが響いた。これで安心だ。亮輔はホツとした。

「なあ、今の地震だよな？ヤバくなかった？俺マジビビったんだけど」

なんだコイツ。

亮輔はあからさまに顔をしかめた。

あのアナウンスがあった直後、隣の車両から学生が走ってきたと思ったら、突然横に座り、亮輔に話しかけてきたのだ。

ツンツンの髪型、だらしない格好 Yシャツははみ出て腰が膝の位置にあった、ピアス。

今時の高校生だ。

身長は亮輔より少し高く、身体の線は細い。見たところ、同じぐら

いの歳だろう。

「そうだね」

亮輔は冷たい視線を送りながら、できるだけ短い返事をした。

「だよなー。てか、俺今日皆勤賞かかったのに、これじゃもう無理じゃねえかよ。ついてねえな」

「皆勤賞？」

亮輔は意外に思った。

とても皆勤賞なんかとりそうには見えなかった。

どっちかと言えば、カッコつけてサボるようなタイプだ。

「そう、皆勤賞。そう見えねえ？だって休んだりサボったりしても時間の無駄じゃん？だったら授業集中して、勉強はテスト前日だけの方がいいじゃん」

「……なるほど」

「でしょ？みんないい加減コレに気付けばいいのにな。なあ、ちょっとあっち行ってみようぜ。」

そういつて自分が走ってきた車両とは逆の車両を指差す。

「いいけど、その前に名前くらい教えてよ」

「そうか。俺、小林聡士。ヨロシク」

「俺、清水亮輔。よろしく」

「じゃ、行くうぜ」

3章 トライアングル

次の車両にはおばさんが一人とサラリーマンが一人。どっちも心配そうな顔をしていた。

その次の車両には怖い男がいた。

亮輔にはヤクザか暴力団にしか見えず、亮輔は前を通るときにヒヤヒヤした。

そして一番端の車両には女の子が一人いた。

聡士がドアを開けた音にびっくりするぐらい緊張している。案の定、聡士が話しかける。

「すごい地震だったね。俺ら、あっちの車両で会って、暇だったから来たの。小林聡士でコイツが清水亮輔。ヨロシクね」

「あ、はい、えーと、よろしくお願いします」

「名前なんていうの？」

「え、私？えと、大村空です」

亮輔と聡士は空の正面に座った。

「今日は学校ないの？」

亮輔が尋ねる。

「はい、創立記念日で休みなんです」

「そっぴや、清水こそなんで？」

「病院。手首ひねっちゃって」

「ふーん。で、俺は寝坊、と。偶然だなあ。じゃ、ここで自己紹介でもしとく？これも何かの縁ってことでさ」

「別に俺はどっちでもいいけど。大村さんは？」

「えーと、じゃ、一応やりたいです」

「よし、決まり！まずは俺からね。小林聡士、17歳、高2、特技はマシンガントークと無遅刻無欠席。はい、次、清水」

「清水亮輔、同じく17歳の高2。特技はサッカー。あとは…特に

特徴なし」

「最後は私？えーと、大村空、私も17歳で高2です。あと、特徴は……照れ屋など……かな」

「おし、自己紹介完了！次は恒例の質問コーナー！じゃまず俺から大村さんは彼氏いるの？」

「えっ……、そんなこと聞くんですか？」

空の顔はもう真っ赤になっている。

「えーっと……、まだいない……です」

「まだ？まだってことはこれまでもいなかったの？信じらんない」
空はさらに真っ赤になってうつ向きしてしまった。

「（なあ清水、ありえなくねえ？大村さん、あんなかわいいんだぜ？）」

聡士が小声で亮輔に話しかける。

「（確かに可愛いけど、今はそんならどうだっただっていいだろ）」

「（よくねえよ。だってこれはチャンス……）」

聡士の声をアナウンスが遮る。

『えー、先ほど起こりました地震によりまして、ただいま連絡の取れない状況となっております。ですので一度外に出まして、歩いて地上に出る道を探すことにいたします。繰り返します……』

「マジ？」 聡士がいやそうな顔をした。

「外に出るのも電車の中にいるのも変わんねえよ」

聡士はまだぶつぶつ言っている。

「いい加減諦めろって」

10分前、集まった乗客に車掌は言った。

「これから二手に別れて線路づたいに歩いて脱出の手がかりを探していただきます」

そして、亮輔たちは恐い男と一緒に行動することになったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1417a/>

空をもう一度

2010年10月9日05時28分発行